

除草剤使用上の一般的注意事項

- ① 処理時期を誤らない。
雑草に対する効果と作物への薬害の面から、除草剤の使用時期はかなり限定される場合があるので、処理時期を誤らないようにする。
- ② 使用薬量を誤らない。
薬量の誤りは薬害・減収等につながる場合があるので、正確に薬量を秤量し、使用する。
- ③ 散布を均一に行う。
除草剤の効果を十分に発揮させ、薬害の発生を防止するため、散布方法に十分注意し均一な散布を行う。
- ④ 土壌条件に留意する。
根に対する作用が強く、しかも土壌中を移動しやすい剤もあり、土壌条件によって薬害が生じたり、効果が低下する場合があるので、適用土壌・保水日数等に十分留意する。
- ⑤ 散布時の環境条件（気象等）に留意する。
葉に露があると薬害を生じたり、薬効が低下したりするものがあるので注意する。また、低温時・高温時の使用に注意する。
さらに、畑作物の土壌処理剤を散布する場合、土壌が極端に乾燥していると効果が劣る場合があるので、土壌が適度の水分を含んでいるときに散布するか水量を多めにする。
- ⑥ 散布時に薬剤が近接圃場へ飛散流入しないよう、また、水田外の水系に流出しないよう、ラベルに記載された散布方法・水管理を厳守するとともに、風向にも注意する。
- ⑦ 使用後、散布機具は十分洗浄しておく。
- ⑧ 農薬ラベルに記載されている湛水・止水期間を守る。また、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

1. 普通作物

(1) 水稻

1) 水稻除草剤使用上の一般的注意事項

- ① 田面に凸凹や深淺のないように均平に整地を行う。
- ② 軟弱徒長苗を移植した場合は処理時期をできるだけ遅らせるか、安全性の高い除草剤を選んで使用する。
- ③ 農薬ごとに適用土壌、保水日数等が定められているので、これに留意し、圃場に適した農薬を選んで使用する。
- ④ 農薬ごとに定められた適切な水管理を行う。
- ⑤ 水質汚濁の防止の観点から止水期間が設定されている農薬では、これを守り、途中での落水やかけ流しをしない。
- ⑥ 水産動物に対する毒性に十分注意する。特に魚毒性の強い薬剤は、河川や養魚池へ飛散・流入しないよう注意する。
- ⑦ なお、湧水田や横浸透（あぜからの漏水等）の大きい圃場では、圃場内の水の移動に注意する。

2) 剤型ごとの除草剤散布上の注意点

① 1キロ粒剤

- ・有効成分含有率が3キロ剤に比べて約3倍に高くなっており、重複散布や多量散布は薬害を起こしやすいので注意する。
- ・粒径は3キロ剤よりかなり大きいので、散粒機はできるだけ微調節可能な機種を使い、均一散布する。

② フロアブル剤

- ・10アール当たり使用薬量は、500mlと1,000mlの2タイプがあるので注意する。
- ・藻類や浮草が多発している水田では拡散性が不十分となり、除草効果の低下や薬害がおこりやすくなるので注意する。
- ・水田水中を拡散して除草効果を発揮するので、散布時に田面の露出がないようにする。

③ ジャンボ剤

- ・水田水中の拡散性の面から、散布時の水深は粒剤の場合よりも深め（水深5～6cm）とする。
- ・藻類や浮草が多発している水田では拡散性が不十分となり、除草効果の低下や薬害がおこりやすくなるので注意する。
- ・強風時は吹き寄せにより、除草効果にムラが出るおそれがあるので散布を控える。
- ・パックのフィルムは水溶性なので、濡れた手で作業したり、降雨で破裂したりすることないように注意する。

3) 早期栽培における除草剤使用上の注意点

本指針に掲載している使用基準は、普通期栽培を基準としている。早期栽培は普通期栽培に比べて田植え後が低温であるため、雑草の発生活長や水稻の生育が異なり、除草効果や薬害の発現程度が変わってくる。そこで、以下の点に注意して使用する。

- ① 水稻の活着が遅いため、薬害回避の点から処理早限はやや遅めとする。
- ② 雑草の発生が遅いため、処理晩限は下表を目安とする。

ノビエの葉期	移植後の日数	
	普通期栽培	早期栽培
1. 0	3	5
1. 5	5	8
2. 0	7	11
2. 5	9	13

※近年は温暖化の影響で雑草の葉齢進展がやや早まる傾向があるので、圃場を確認して処理適期を逃さないように注意する。

- ③ 雑草の発生期間が長い場合、移植後の除草剤処理で完全に防除できない場合は、その後の雑草の発生を確認して、中・後期除草剤との体系防除を行う。または移植後は初期剤を散布しておき、その後一発処理剤との体系処理とする。